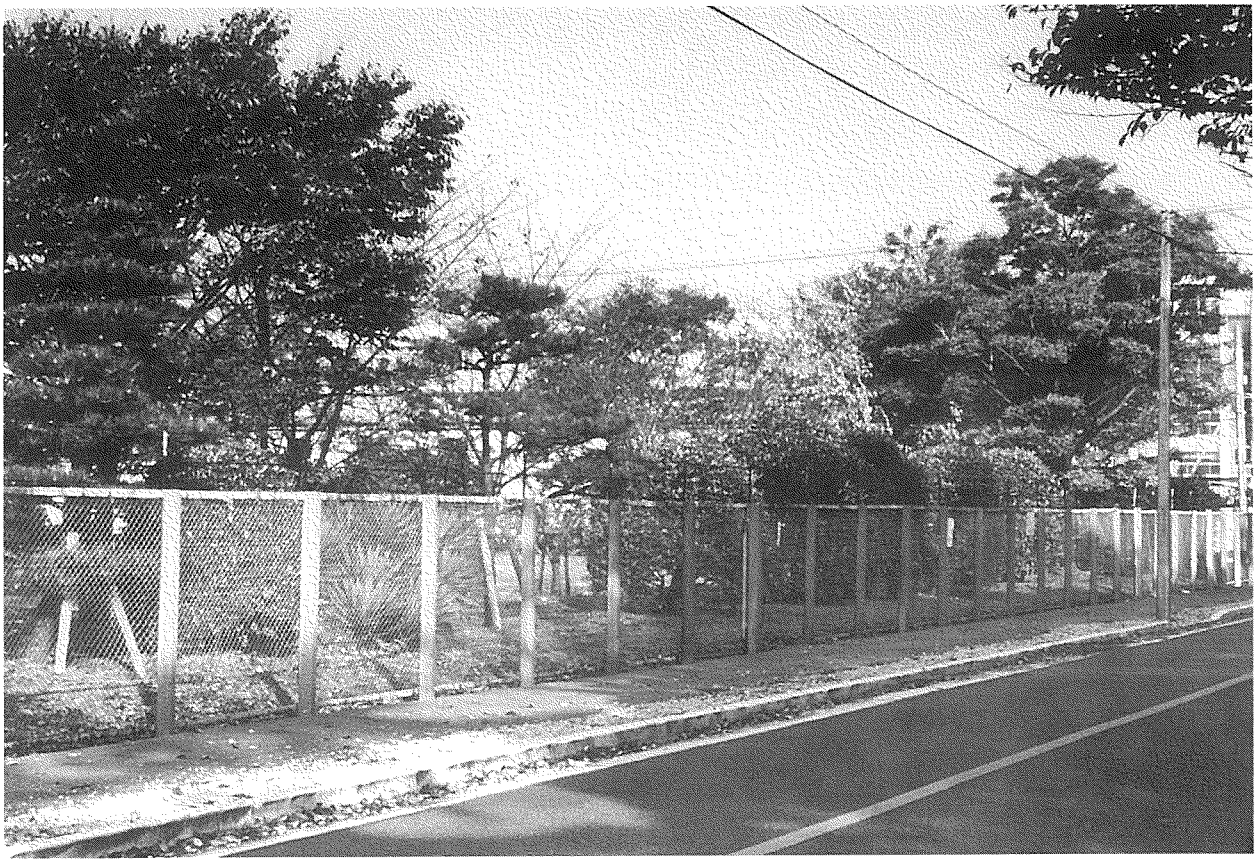
春日野町遺跡

発掘調査の概要



1995

名古屋市教育委員会

例　　言

1．本書は、春日野町遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、名古屋市南区春日野町、霞町、貝塚町に所在する名古屋市水道局春日野配水場内で実施した。

3．発掘調査の理由は、名古屋市土木局が散策道路の整備を計画したためである。

4．調査面積は、約280㎡である。

5．調査期間は、1994年(平成６年)11月24日から12月22日までである。

6．調査担当者は、野口泰子、伊藤厚史である。

7．排土工事は、安藤技建株式会社が工事請負で実施した。

8．遺構図等の作成は、松岡測量設計株式会社に委託した。

9．本書に使用した水準値は、東京湾の平均海面(T.P.)を使用した。

10．出土遺物は、コンテナケース３箱分が出土した。

11．検出遺構について兵庫県文化財保護指導委員眞野修氏から御教示を得た。

12．陶器の墨書及び愛知郡桜村絵図の判読は、池田陸介氏による。

13．出土遺物の整理及び概報作成には、神谷悦子の協力を得た。

14．出土遺物等は、名古屋市見晴台考古資料館で保管している。

15．本書の編集・執筆は、野口泰子(Ⅰ・Ⅱ)、伊藤厚史(Ⅲ・Ⅳ)が担当した。

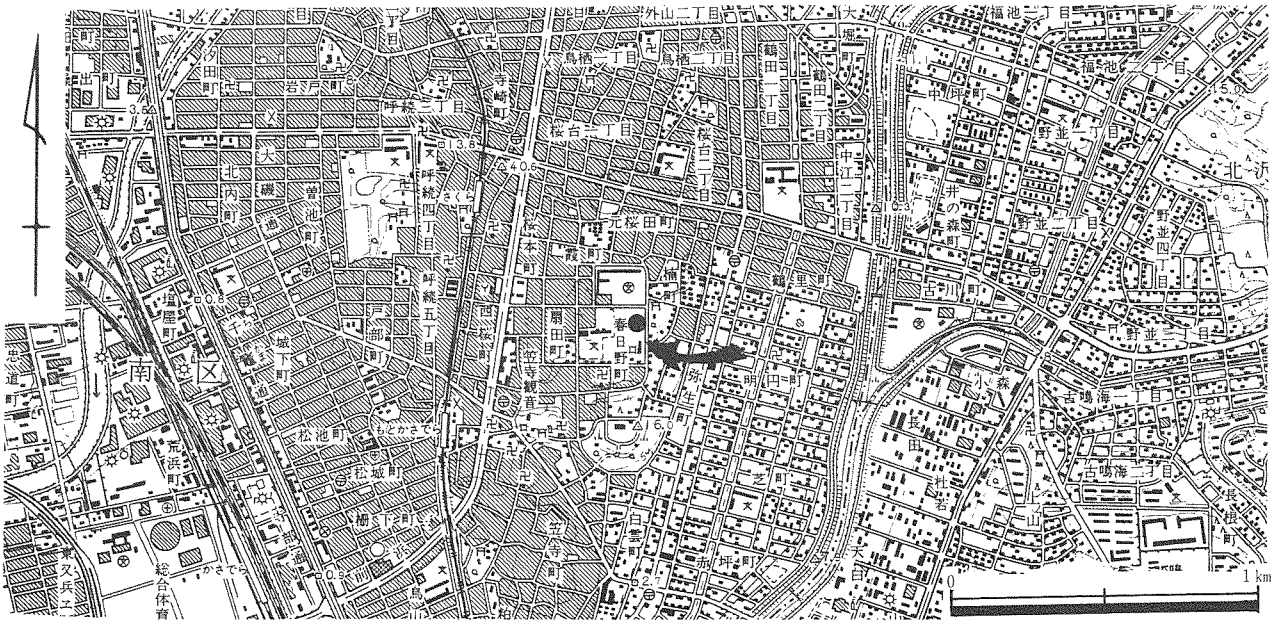
目　　次

Ⅰ　位置と環境　……1

Ⅱ　調査の経過　……1

Ⅲ　遺構と遺物　……2

Ⅳ　まとめ　……5

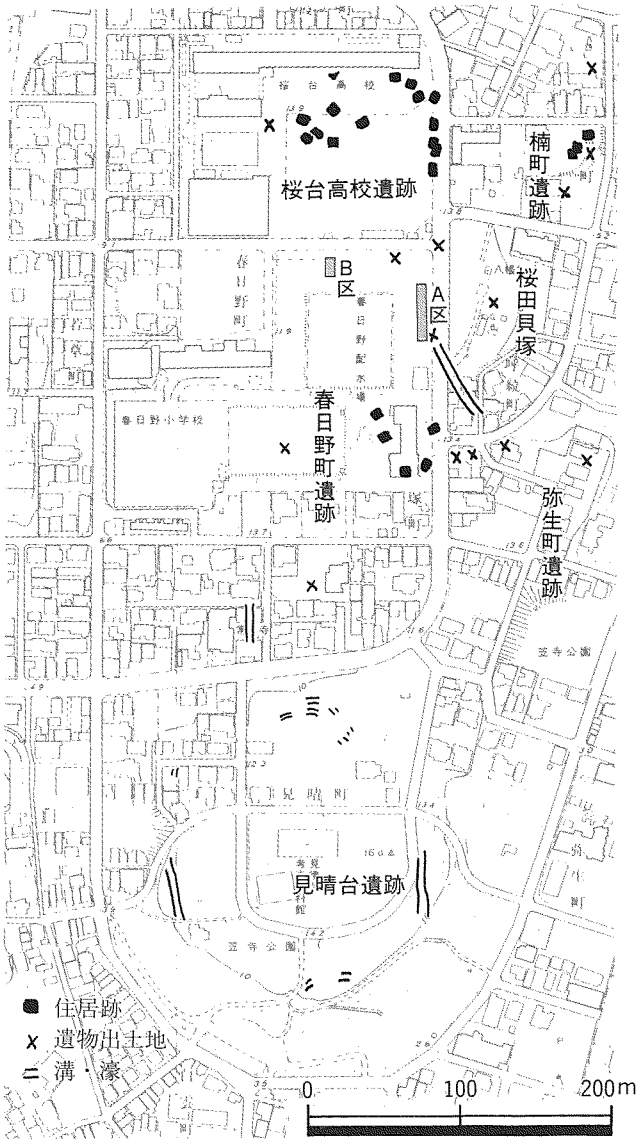


第１図　位置図　　国土地理院　1：25,000地形図　名古屋南部　平成４年

I　位置と環境

南区の地形は、北東部の台地とその他の低地に分けられる。台地は熱田層からなる中位段丘で、市の中心部から続き、標高は10～15mである。台地の東側と北西側に、天白川、山崎川が流れ、島状を呈している。台地の南、天白川と境川の合流地あたりは、古くから村が形成され、西側の海浜は塩つくりが行われた。江戸時代になると海浜は新田開発により姿を変え、現在の南区は海に面していない。

春日野町遺跡は台地の中央附近に位置し、名古屋市水道局春日野配水場とその南の住宅地を範囲(註1)とする。昭和35(1960)年の貯水池工事と同37(1962)年の拡張工事の際、弥生時代の土坑や古墳時代の住居跡が確認され、南の住宅地では溝状遺構が観察されている。周囲の遺跡をみてみると、北隣に古墳時代の住居跡や奈良・平安時代の土坑が検出された桜台高校遺跡、更に北には弥生時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓のある六本松遺跡、谷を挟んだ南隣には弥生時代の集落がある見晴台遺跡、東隣には魚形土器が出土した桜田貝塚・貝塚町遺跡があり、この遺跡の溝状遺構(弥生時代)は北西から南東に走っており、本遺跡まで連続していると思われる。更に東には楠町遺跡があり、西側には扇田町遺跡、桜本町遺跡等がある。この地域には、弥生～古墳時代を中心とした遺跡が密集している。



第2図　調査区と周辺遺構図（1：5,000）

註1　以前は、配水場内は春日野配水場遺跡、その南は春日野南遺跡と分けて呼ばれていた。

II　調査の経過

周辺の道路整備に伴い、ここを広場とする計画が土木局からあった。過去に調査が行われておらず、また、試掘が出来ないため残存状況は不明であるが、東側の道路工事の際に溝状遺構が確認されており遺構等が残存していると判断し、調査を実施することとなった。調査は、平成6年11月21日から始める予定であったが、開始直前に、場外に移植する予定の植木は、数本はそのまま残し、数本は場内の他の場所に移すと言われた。移植先も遺跡内であるため調査が必要であり、急遽、移植先から調査をすることとなった。11月24日に移植先(B区)の調査を開始、－1.6mまで掘削するが、地山は確認できない。12月1日、移植する植木の掘り上げが始まる。所々で地山がみえる。6日、A区の表土除去開始。北側には包含層が残り、溝状の落ち込みがある。表土除去の済んだところから包含層掘削、遺構検出・掘削をしていく。13日、清掃、写真撮影。14日、壁面断面図等作成。平板測量が始まる。16日、埋め戻し開始。22日、調査終了。

Ⅲ　遺構と遺物

層序　調査区（Ａ区）は、中央部から南側は、0.25～0.5m堆積する表土の下で黄白色砂シルト（熱田層地山）を検出した。遺物包含層や熱田層の上位層である橙黄色シルトは検出されなかった。中央部から北側では、表土の下に橙黄色土、褐色土が0.2～0.3m堆積していた。一見地山のようであったが、橙色シルト、黄褐色シルト、黒砂の各ブロックが混じった土である。この土層中からは遺物は出土しなかった。

ＳＤ１　調査区北端で検出した。形状から溝状遺構の一部と思われる。検出面は褐色土である。埋土は黒褐色砂シルトで、下位層には地山褐色土ブロックを含んでいた。出土遺物は、弥生土器もしくは土師器の小破片十数点と山茶碗の小片１点がある。

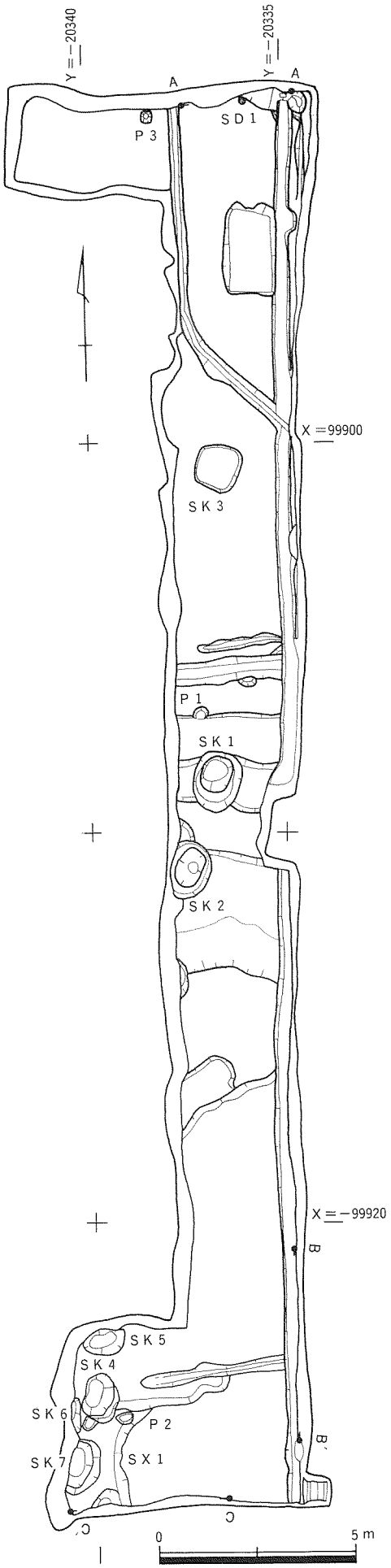
ＳＫ１　調査区中央部で検出した。長径約1.5m、短径約1.2m、深さ約0.7mを測る。中程に一段平坦面がある。埋土は灰色砂シルトで、コンテナ２箱分の陶磁器、瓦及び少量の須恵器、中世陶器が出土した。陶器は、小皿（第５図１）、湯呑（第５図２）、徳利（第５図３）、蓋物（第５図４、５）、碗（第５図６、７）、甕、水甕、瓶掛、擂鉢、馬の目皿、磁器は碗、皿、仏餉具等がある。蓋物は底部に墨書で『セイケ』とある。土師器は、鍋（第５図８）がある。底部に突起が３箇所つく。瓦の加工円盤１点がある。遺構の形状から甕を埋設していたと思われる。甕は18世紀前半代と思われるが、陶磁器の大半は18世紀後半から19世紀代のものであろう（中野1986-参考文献３、藤澤1987-参考文献５）。

ＳＫ２　ＳＫ１の南側で検出した。長径約1.5m、短径約1.0m、深さ約0.5mを測る。灰色砂シルトを埋土とし、陶器甕の破片が多数出土した。ＳＫ１同様に甕を埋設していたと思われる。甕は19世紀前半代と思われる（中野1986-参考文献３）。

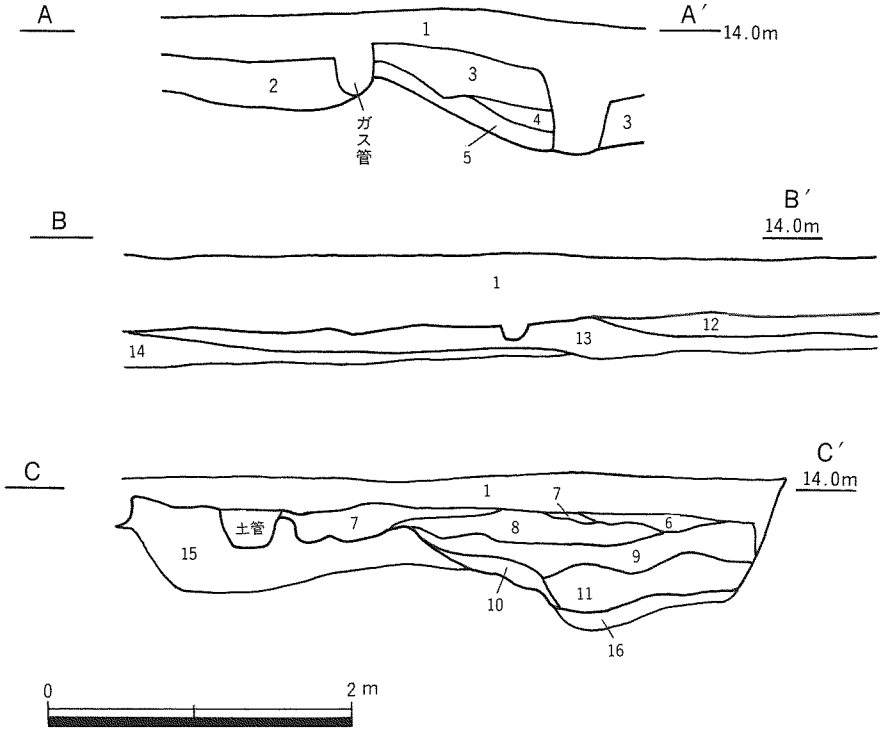
ＳＫ３　約1.1mの方形を呈し、深さ約0.45mを測る。埋土は地山の土の崩壊土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ４　長径約1.2m、短径約0.8m、深さ約0.6mを測る。灰褐色土に橙、黄、灰白色の砂シルトブロックを多く含んでいる。ＳＫ５～７も同様の埋土であった。須恵器の小片１点、中世施釉陶器片１点が出土した。

ＳＫ５　長径約1.1m、短径約0.7m以上、深さ約0.8mを測る。中国製青磁の小片１点が出土した。



第３図　遺構平面図（Ａ区）



第４図　土層図

写真１　土層断面（ＳＤ１）

1　表土
2　褐色土
3　黒褐色砂シルト
4　〃　（地山褐色土ブロック少し含む）
5　〃　（地山褐色土ブロック多く含む）
6　灰色土
7　灰褐色土に地山褐色土ブロックと黒褐色土ブロックの混土
8　灰褐色土にいろいろな地山ブロックと黒褐色土ブロック少し混じる
9　灰褐色土
10　〃　（地山黄白色ブロック多く含む）
11　〃　（炭化物と黄褐色シルトブロック多く含む）
12　地山（白色砂シルト）
13　地山（黄白色砂シルト・黄褐色砂シルト）
14　地山（橙色粗砂）
15　地山（黄白色砂シルト）
16　地山（黄褐色・灰白色粗砂）

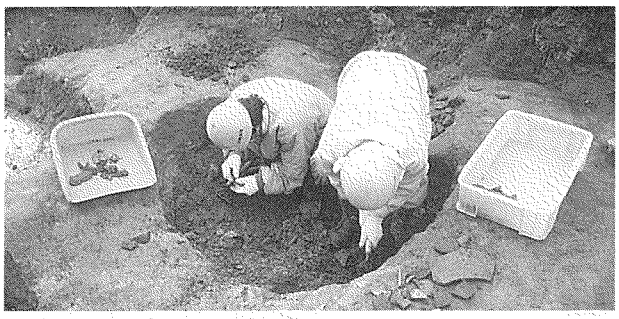


写真２　調査風景

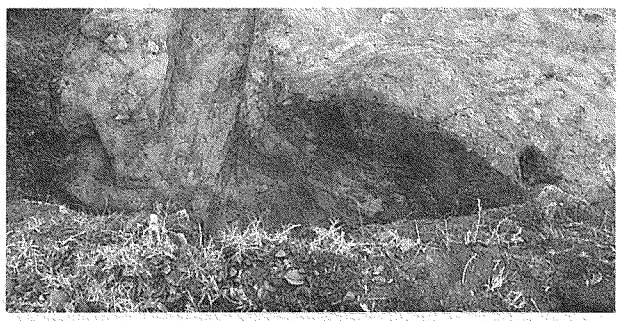


写真３　ＳＤ１

写真４　ＳＫ１　遺物出土状況

写真５　ＳＫ１

写真６　ＳＫ４～７・ＳＸ１・Ｐ２

ＳＫ６　調査区南西端で検出した。大半が調査区外になる。深さ約0.5mを測る。土師器の細片１点が出土した。

ＳＫ７　長径約1.4m、短径約0.8m、深さ約0.6mを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＸ１　調査区南西端で検出した。幅0.8～1.0mの溝状にゆるやかに北東に延びるが、ガス管で切られその先は明瞭でない。灰褐色土を埋土とし、上位は地山ブロック土を多く含む土で覆われていた。出土遺物には、近世陶器、瓦質土器、須恵器、山茶碗の小片、須恵器の加工円盤１点がある。

Ｐ１　直径約0.3m、深さ約0.08mを測る。黒褐色砂シルトと地山橙色ブロックの混土を埋土とする。遺物は出土しなかった。

Ｐ２　直径約0.3×0.4m、深さ約0.1mを測る。山茶碗の小片２点が出土した。

Ｐ３　直径約0.25×0.3m、深さ約0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

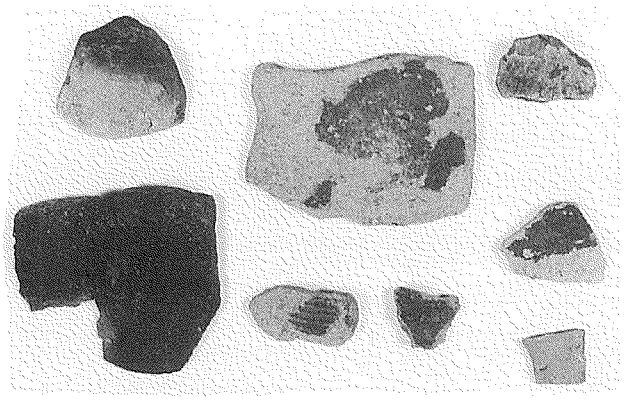


写真７　ＳＤ１出土遺物

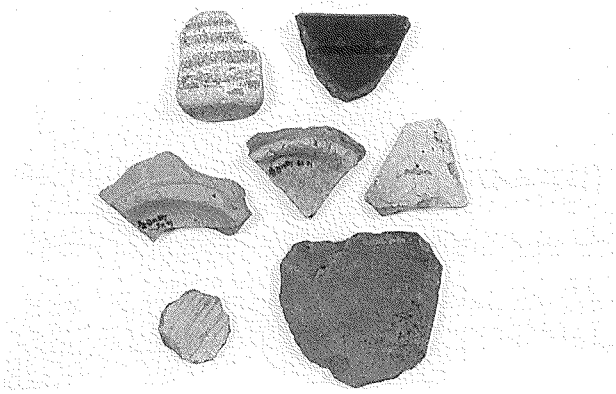
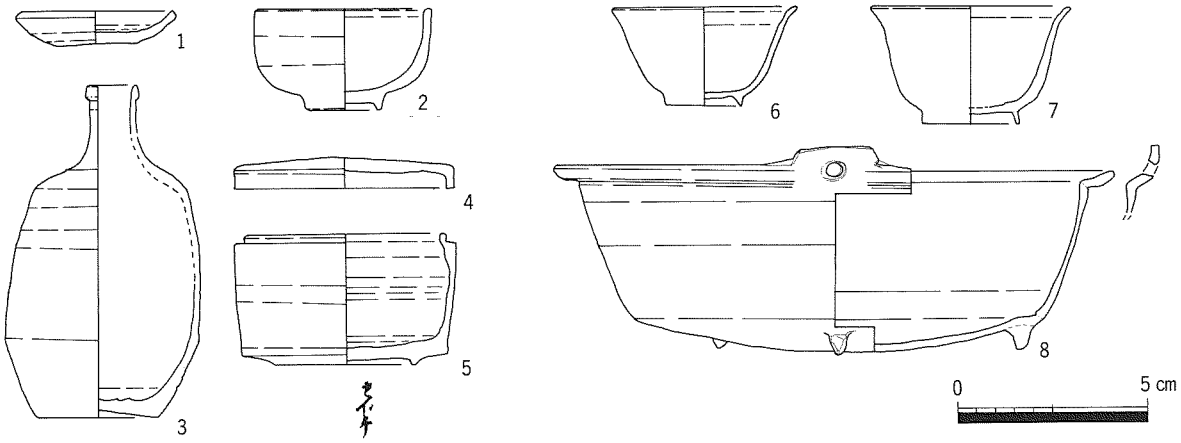


写真８　ＳＸ１出土遺物

写真９　ＳＫ１出土遺物



第５図　ＳＫ１出土遺物

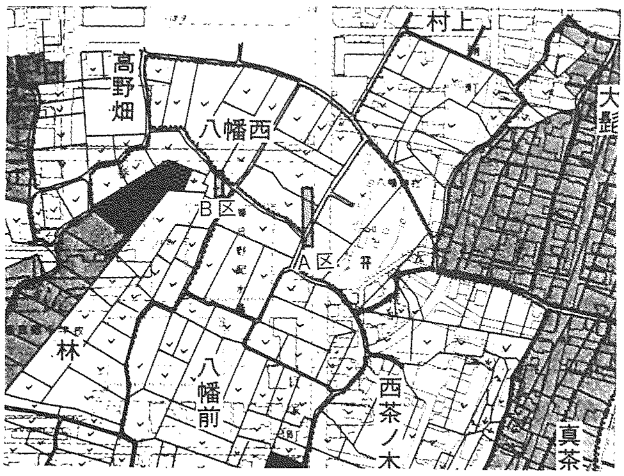
Ⅳ　ま　と　め

春日野町遺跡は、今回が初めての発掘調査であった。かつての配水池築造工事の際の情報や隣接する桜田貝塚の弥生時代の濠の存在から、弥生時代から古墳時代の遺構、遺物の検出を主な目的として実施した。しかしながら、調査区（Ａ区）の大部分において表土層の下で基盤層である黄白色砂シルトを検出した。このため弥生時代から中世に該当すると推定される遺構は、４基にすぎなかった。ただ、19世紀代の遺構からは、須恵器や中世陶器が出土しており、かつては遺物包含層か遺構が存在したことを物語っている。

ＳＫ１、ＳＫ２は、常滑産の甕を埋設していた跡と思われた。このような施設としては肥溜が考えられる。真野修氏の御教示によれば、肥溜は肥の運搬の利便性から道の脇に作るようである。地籍図（第６図）によると確かに調査区付近に小道が通っている。ＳＫ１は、甕以外にも陶磁器や瓦が廃棄されており、生活の場が付近に存在していたことを伺わせる。しかし、愛知郡桜村絵図（第７図）や地籍図によれば、集落はやや北方に位置し、調査区周辺は八幡社を除き畑地である。図に表現されない家が付近にあった、どこからか運んで来て捨てた、廃棄年代が20世紀に降る、などの理由が考えられる。

また、Ｂ区（樹木の移植地点）は、掘削深約1.6mまで表土層であった。かつての谷地形部分に該当することに起因する。

写真10　1940年頃の航空写真　日本軍撮影



第６図　地籍図　（１：5,000）1884年

第７図　愛知郡桜村絵図　1841年『尾張国町村絵図』より

写真11　調査区(A区)北から

写真12　調査区(A区)南から

写真13　調査区(B区)南から

写真14　調査区(B区)東壁

参考文献

1 飯尾恭之　「春日野町遺跡D区―11地点の土器と濠状遺構」『名古屋考古学会会報No.6』1965

2 岡本俊朗　「桜田貝塚の復元的再整理」『年報Ⅰ』1980　名古屋市見晴台考古資料館

3 中野晴久　「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』1986　常滑市教育委員会

4 名古屋市教育委員会編　『名古屋の史跡と文化財(新訂版)』1991

5 名古屋市南区役所編　『南区誌』1979

6 藤澤良祐編　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』1987
瀬戸市歴史民俗資料館

7 三渡俊一郎・飯尾恭之　『南区の原始・古代遺跡』1969
名古屋市教育委員会

春日野町遺跡　発掘調査の概要

1995年3月31日

編集　名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市南区見晴町47番地

発行　名古屋市教育委員会

印刷　西濃印刷株式会社